エッチだけどエッチじゃないでもちょっとエッチなコミュニケーション

Wedge White

エッチだけどエッチじゃないでもちょっとエッチなコミュニケーション

「先生、ふと思ったんですけど、わたしたちってお付き合いを始めてから、エッチ以外に恋人っぽいことってしてなくありません？」
「……なんだよ、それ。お前的にどういうのが恋人っぽいんだ？」
わたしと先生が、ただの生徒と先生ではない、特別な関係になってから一ヶ月ほどが経ちました。
その間にいっぱいエッチなことは本番（パイズリ）、非本番（それ以外）を問わずに色々としてきましたが、こう、甘い感じのことをしてきていないんですよ。
エッチはまあ……甘いというよりは、ほろ苦いので（物理的に）。
「まあ、王道はデートですよね。街をぶらぶら歩いて、店先で見つけた可愛いアクセサリーをプレゼントしてもらったり、ご飯を食べに入ったお店で『ここは俺が払うよ』『ううん、割り勘にしよ……？』みたいなやりとりをしたり、先生がトイレに行っている間、一人で待っていたわたしがナンパされちゃうんですけど、戻ってきた先生が格好良く助けてくれたり……！」
「最後のはともかく、基本、金使う話ばっかりだな……ルカみたいなお嬢様が、今更お金を人

に使わせることを求めるのか？」

「うっ……それは、その……大切な人によくしてもらってる感が嬉しい、と言いますか……」

「よくしてもらうって、金払ってもらうことだけじゃないだろう。むしろ、金なんて打算で出すやつはいくらでもいるぞ。ちょっとでも気に入られたい、親しくなってから〝先行投資〟以上の利益を得たい、そういう気持ちから上辺だけ親切にするやつは人間には多くいるという。……神だってそうだ。楽園にいるからといって、誰もが善人じゃない。いや、そもそも善の定義というものは――」

「……じゃあ、先生はわたしにどんなことをしてくれるんですか？」

真面目に語り出した先生を遮るように、そう問いかけます。

でも、そう言っているわたし自身、本当に先生にしてもらいたいことって、どういうことなんでしょうか。

なんだか。

ひどく自分が、自分の思い描いていた恋人関係というものが、薄っぺらく感じてしまいました。

だって、結局わたしは、先生とエッチなことをしたかっただけ。ただ、学校でも家庭でも教えてもらえなかったことに興味があっただけ。……そうなんじゃないでしょうか？

そんな不安が首をもたげます。恋愛を飛ばしてエッチをしてしまう、なんだかそれって……。

「こういうのじゃ、お前にとっては安っぽいか？」
「えっ……？」
先生はぽん、とわたしの頭の上に手を置きました。そして、優しく髪をすくように撫でてくれます。
「せ、先生、えっと……」
「俺はまだまだ家でルカがどんなだったかとか、よく知らないけど……多分、こうやって気安く体に触れられることって、なかっただろ。だから、これがその……彼氏の特権だ。十分に恋人らしいこと、だろ」
「も、もうっ……本当に安っぽいです。頭を撫でるぐらい、誰でもできるじゃないですか。……先生以外には許しませんけど」
「誰にでもできるけど、俺にしかできないこと、か。いいな。哲学的だ」
「あっさい哲学です。仮にも先生なんですから、もっと深いこと言って魅せてください……。でも、先生」
「あぁ」
「そういうところが、好きです」
頭の上に手を置かれて、少しだけ髪をくしゅっとしてもらう。ただそれだけの行為。
全然エッチじゃないし、特別感もないし、なんでもない、簡単なこと。

それなのにわたしの胸は、ぽわーっ……と温かくなっていくようで。
もっと求めるように、先生の方にしなだれかかってしまいました。
「……先生の、におい」
「あ、汗臭いか？」
「ううん。爽やかな、いいにおい。男の人のにおいです」
「ルカは……相変わらず、甘いにおいだな」
「食べてくれちゃってもいいですよ？」
「今はお腹いっぱいだよ。どんなに美味いものでも、無理して食ったらいまいちだからな」
そのまま先生はぎゅっ、と抱きしめてくれました。
……そう言いつつ、やっぱり食べてくれちゃってるじゃないですか。正直、このままお礼ってことで一ズリぐらいしてあげちゃおうと思ってたのに、それをする気も起きないぐらい……お腹いっぱいです。
だから……。
「キスして、いいですか？それぐらいならしてくれますよね？」
「ああ、それぐらいなら……するか」
「はいっ……」
わたしと先生はかなり身長差があるので、先生がしっかりと身をかがめた上で、わたしは背

伸びをしないと上手くキスできません。
そうすると、背伸びしたわたしの体勢がちょっと不安定になってしまうので、先生が軽く腰に腕を回して支えてくれます。
「んっ……ちゅっ……れろじゅっ……じゅるっ、ちゅっ、ちゅるじゅっ……れろ、れじゅっ、れじゅちゅうううっ……！」
今日はあんまり深いキスをする空気じゃないので、軽くで済ませようとも思ったんですが、いざ始めてしまうと……抑えきれませんでした。
もっともっと先生の体温を感じたくて、激しく……求めちゃいます。
「れろっ、れちゅっ……ちゅるちゅっ、じゅるうっ……。んはぷっ……あむちゅっ、ちゅるずっ……ちゅむぅっ……あむっ、れろっ、れぷぅっ……ふぁぁっ……」
「ルカ……」
「先生。好き、です。やっぱり先生のこと、誰よりも、好き……」
「俺もだよ。……なんでこんなに可愛いんだろうな、ルカは」
「先生が素敵だからです。先生がこんなにもわたしの心を奪ってしまったから、もっと先生に好きになってもらえるようなわたしになろうって、思ったんです。だから、先生好みで当たり前、なんですよ」
「……そうか。可愛いな、ルカは」

「はい、可愛いんです。先生のルカは」
「そんなに可愛すぎるからさ、ルカ……ちょっと、いいか？」
「うふっ……結局エッチですか？もーっ、先生ったらやっぱりエッチなんだ」
「誰よりもエッチなやつが言うなよ……」
先生は私の体を少しだけ遠ざけました。……エッチをしようとすると、完全に密着してもいられないんですよね。なんだかそれがもどかしくて。
「どうせ先生のおちんちん、もうバッキバキの勃起ちんちんなんでしょう？わたしのおっぱいでよしよし、してあげますね」
「なんだ、頭撫でてやったお返しか？」
「はい、そうですよー。わたしが先生の頭をなでなでするのはちょっと無理があるので、おっぱいでなでなでしてあげます」
「ったく、敵わないな……」
先生は苦笑しながらも、ズボンからおちんちんを取り出します。私も胸を出して……と思いましたが、今回は服を脱がず、ブラも取らずに服の中におちんちんを入れて、挟み込みました。
「う、うわっ!?うっ、くぅっ……これ、きついなっ……ブラで胸が抑えつけられてるから、圧がすごいっ……！」
「もう今週は学校、終わりですからね。制服もブラも、ぜーんぶ汚しちゃっていいですよ。あ

ははっ」

私としても夢だった着衣パイズリ、です。無理のないサイズの大きなサイズのブラを着用してますが、ブラは奇麗な谷間を作るような構造になっているため、どうしても胸は中央に寄せられていて、そこにおちんちんを通してしまえば、思い切りおっぱいと密着してしまうのは道理。

みちみちに詰まった柔肉のトンネルの中でおちんちんは立ち往生しちゃってます。

「さーて、動きますね……んっ、よっ、と……。あ、あれ？きつすぎて動きません、かね？」

「くっ、うぁぁっ……！乳圧、すごっ……！これっ、このまま暴発しそうだっ……！」

「ええっ、ちゃんと動く前にイッちゃわないでくださいよ……んーとっ、こういう時は……じゅじゅっ、れろぉっ……」

「う、うぁぁっ!?」

口の中に唾液を溜めて、それを舌から落としておっぱいの谷間とおちんちんへ。どろりとした唾液が、早くも漏れ出ていた先生の先走りと混じり合います。

「うふっ、これで滑り、よくなりますかね。……よい、しょっ……ふふっ、先生のおちんちん、すっごく感じられます……！」

「ル、ルカ、これっ……！あっ、あぁっ、くふぅっ……！ヤバイ、これ、強いっ……!!」

「ええ、そうですよー。ルカちゃんはおっぱい強者ですから。んふぅっ……でもこれ、わたし

も嬉しいっ……先生のおちんちん、カリの形とか、根本のビクビクってしてる感じとか……全部わかるんですっ……。あっつい精液、もう上まで上がってきちゃってますね……先生、かーわいいっ」

「うっ、あぁっ、で、出るっ……！ルカ、くぅっっ……!!」

イきそうになる直前の先生の顔、とっても可愛くて……大好きです。

だからこそ、わたしは……。

「よい、しょっ。むぎゅぅううっ……」

「あっ、あっ、あぁぁっ……!?ル、ルカ……？くっ、ううっ……きつすぎて、出せないっ……！」

「えへへっ、おっぱいでおちんちん押し潰しちゃいました。まるでおっぱいでだっこしてるみたいですね、これ……」

ちょっとだけ、イジワル。

ぱんぱんに張って、今にも精液を吹き出しそうだったおちんちんをぎゅうっ、と谷間に押し込めちゃって、出させないようにしちゃいます。

「あっ、あっ、くぁぁっっ……！ル、ルカ、出させてくれっ……！こ、これっ、イきそうだけど、イけなくて、おかしくなりそうだ……!!」

無理やり射精を我慢させられたおちんちんは、いつまでも胸の中でピクピク、ピクピク……

苦し紛れに先走りをちょろちょろ出しながら、震えています。

「ごめんなさい、苦しめるつもりはなかったんです。でも、こうやってイく直前に一回我慢させちゃってから、出した方が……」

手を離し、おちんちんを解放してあげます。すると、中でぱんっ！と弾けたかのようにおちんちんが跳ね上がって、先走りをずるずると胸の谷間に塗りつけた後、顔を出した亀頭から……。

「んぁぁぁぁぁぁっ！でっ、出るぅううっ……!!」

「ふぁぁぁぁぁっ!!すっごい、すっごい射精ですっ、先生っ……！イキ顔、かわいい……!!」

「くぁぁぁぁぁぁっ!!」

一気に噴き出す白濁液……噴水なんかよりもずっとすごい。間欠泉のような大量射精が、服の中で噴き上がってしまいます。

大量の精液は制服の内側から染み出して、鼻の中いっぱいにえっちなにおいを充満させました。

そして、おっぱいの中を少しずつ。しかし着実に、とろとろと落ちていきます……流れた精液はわたしのお腹を伝って、やがて脚にも流れ落ちて。少しだけ、きゅんってアソコが疼きました。

「ル、ルカ……こ、これ、すごかった……。やばかったよ……」
「先生を見てたら、ぜーんぶわかりましたよ。喜んでくださってよかったです」
「それにさ、ルカ……。白い制服に、ちょっと黄ばんだ精液が染み出してるのって……視覚的にもエロいん、だな……」
「そうですね……。うふふっ、白濁制服姿のルカちゃんでも一発、抜けちゃいそうですか？」
「ま、まあ、割りと真剣にな……」
「もーっ、本当に欲望に正直な先生ですね。……大好きです」

わたしはこれまでも。そしてこれからも、先生の恋人。
先生とエッチなことも、甘いこともいっぱい経験していく、彼にとっての〝彼女〟。
一人でいた頃には経験できなかったことを経験する度、明日が、次の瞬間が、楽しみになっていきます。
「わたしがエッチなんじゃなく、先生がわたしをエッチにさせたんですからね」
改めて、わたしは先生のことが大好きなんだな、と思いました。

すっごい射精・・・
イキ顔、かわいいです♥

ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

エッチだけどエッチじゃないでもちょっとエッチなコミュニケーション

２０１９年　７月１６日　初版

奥　付

著者　Wedge White
URL　https://wedgewhite-team.wixsite.com/home
E-Mail　konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(http://tokimi.sylphid.jp/)